

ブラコン妹ちゃんは貞
操観念逆転世界で大好
きなお兄ちゃんに開発
される

猫丸88

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貞操逆転世界に転生したシスコンお兄ちゃんが、長いこと離れて暮らしてたブラコン妹を価値観の違いを盾にして誘惑しまくる話。

絶対お兄ちゃんの誘惑なんかには負けないんだからね！（負けます）

※エロはちよつとずつ入れていく予定ですが軽めのが多いです。

※お兄ちゃんは結構なクズです。

※妹ちゃんはマゾです。なんだかんだされつつも悦んでいます。

※不定期更新になります。試験的な話なので意見頂けると嬉しいです。

目次

プロローグ | 1

第1話 始まりは | 6

第2話 控えめに言って天使 | 19

第3話 私のこと好きなの? | 33

第4話 とりあえず相談してみる

49

第5話 お宅訪問 | 64

第6話 お兄ちゃん | 72

第7話 登校 | 84

第8話 下校 | 94

第9話 溺れていく | 101

第10話 とあるLINEでの会話

プロローグ

一体いつからこんなことになったんだろう。

男の人からエッチなことをされる女子中学生。どこのエロ同人だという話だ。

私はお兄ちゃんの腕の中でビクビクと怯えるように、あるいは更なる刺激を期待するように縮こまっていた。

白い生地のカミソールと紐のようなショーツ。透けるほど薄いニーソックスと長手袋が私の玩具としての正装だ。

手は頭の後ろで組んだ状態で下ろすことは許されていない。

しっかりと腋の下を見せた状態で、抵抗しません、私は何をされても無抵抗です、ということをアピールする。

「雪って本当に弱いよね。敏感過ぎない？」

「はうあつ!! あああ!!」

後ろから抱き締められ囁かれる。

こそそとくすぐるような吐息が耳を擦り上げて私は素つ頓狂な声をあげてしまう。男の人の腕の中に抱き締められて多幸福感と、私ではどう足掻いてもこの人には勝てないんだと分からされて、キュンツとお腹の奥で音が鳴った気さえした。

疼く子宮の上を細身だけど確かに力強い男の人の手が撫で回す。

獣のようにふーふーと呼吸が荒く乱れていく。

「14歳だっけ？ 慣れてないし一番敏感な時期だよ。開発したらもつと弱くなっちゃうのかな？」

開発済みの耳穴に言葉を流し込まれて、あつあつ、と小さく喘ぎ声を発してしまう。

お兄ちゃんはその言うけど、既に私の身体は開発され尽くしている。

今では身体全部が弱点で全身が性感帯だ。

これまで膣やアナルやクリトリス、乳首なんかの性感帯から腋、お腹、足みたいになんでもない個所まで開発された私の感度は確実に同い年の友達と比べても高すぎるくらいのものでらう。

毎日マッサージュをされて中学生なのにポルチオまで性感帯として覚醒させられている。

一日に何度も絶頂させられて、オナニーの回数まで管理された私はお兄ちゃんの玩具だ。

面白半分に100回イクまでオナニーをさせられたり、1か月オナ禁させられたこともある。

しかもその間は色んな誘惑で私を惑わせてきたり。だというのにオナニーしたらオナニーの映像をネットにばら撒くと脅される。

理不尽だなんて言おうものなら一晩中イカされる。イツても絶対に許されずに屈服アクメさせられる。

24時間組み伏せられて力の違いをこれでもかと分からされてしまうのだ。

髪の毛なんかもお兄ちゃんの好みに合わせているし、陰毛の手入れや剃り方まで指示されている。

勝手な絶頂は許可されていないし、やれと言われたらどんな命令にも従わされる。

「わ、私、こんな、全部お兄ちゃんのせいだ……」

今までセックスに関して最低限の知識しか知らなかったのに、色んな変態的な言葉を教え込まされた。

実技と一緒にいけない知識を叩き込まれて、あらゆる変態行為に応じたせいで、お兄ちゃん好みに性癖を捻じ曲げられている。

「おっと、生意気は駄目だぞ」

口答えをした私を叱るように乳首を抓られた。

ゴリツと乳輪の中の乳管ごと芯のような部分を擦られる。

「あああああああつー！」

ピンピンに勃起した乳首。

今では色艶を増してやや濃い色素になっている。

それもこれも毎日嬲られて、暇なときは常に弄るように命令をされているからだ。

最近になってまた少し長く太くなってしまう気がする。

「や、やあ……っ」

肥大化した勃起乳首をコリコリとしながら聞いてきた。

「嫌なの？ 嫌ならやめとこうか？」

足の付け根。鼠径部を爪先でカリカリと引つ搔いたり指の腹で擦りながら私の性欲をこれでもかと煽ってくる。

腰がへこへこと情けなく揺れ動いてしまう。もじもじとしたら、お尻にお兄ちゃんの股間が押し当てられて余計に興奮させてくる。

こんな身体にされたというのに、困ったことに現状を自分が決して嫌だと思っていないのが問題だった。

お兄ちゃんはハッキリ言って格好いい。

どこの俳優だつてくらい整った顔。イケメンボイスから繰り出される言葉責めはそ

れだけで背筋をゾクゾクと震わせる。

性的なことを忌避する男の人なんていっぱいいると思う。

だけどお兄ちゃんは……浮世離れしてるとでも言えばいいのだろうか。

エツチなことに対して寛容すぎる。

その対象が自分に向けられていることに私は女として悦びを確かに覚えていた。

嫌じゃない、です……そう小声で、しかし確かに伝えるとお兄ちゃんはご褒美だと言わんばかりに丸々と太った陰核のクリ皮を根元から剥き上げた。

「あつあつあつ、あああああああああつ!!!」

開発され尽くした陰核は剥かれただけで果ててしまうほど敏感だ。

いい子だね。そう囁かれて私はゾクリと仰け反った。

みつともなく淫らに顎を逸らせてしまう。

いつからこんな生活になったのか、それはお兄ちゃんがこの家にやってくることになった日まで遡る――

第1話 始まりは

「悠くんのこと覚えてる?」

始まりはお母さんのそんな言葉だった。

6月中旬。夏の暑さとじめじめする梅雨の湿気が肌にまとわりつく季節。

つけっぱなしのテレビの中では政治家が男性の出生率について語っていた。

どうやらまた下がったらしい。助成金を増やすべきか、なんてことについて話し合っている。

兄妹婚についての話題も出たので私の意識がそちらへと誘導されたけど、真面目な話らしくお母さんはリモコンでテレビの電源を落とす。

私は空調の効いた部屋で素麺をずるずると啜りながらお母さんに視線を向けた。

「悠って、兄さんのこと?」

私には年の近い兄がいた。

“いた”というのはそれが過去形だからだ。

とはいえ死別したわけではない。

詳しいことは覚えていないし聞かされてもないけど、両親は私が幼い頃に離婚した。

私自身が小さい頃のことだったからというのもあるし、父は家庭を鑑みない人だったから印象に残っていないということもあった。

それでも人工授精がほとんどの現代において男親がいることは非常にレアケース。だけど当時はその珍しさが分かっていなかった。

普段父親は家にあまりいなかったし、血が繋がってるだけの他人という印象が強かったから。

そんな父親に関してあまり関心のない私の覚えていることがある。それはお母さんの泣き顔。

離婚するときに最後まで泣いていた母の涙を私はずっと覚えていた。

女らしくすっぱり諦めれば……なんて他人事なことは言えない。私だつていざその時になったら落ち込んでしまったから。

幼いながらもつとどうにかできなかつたのかとこれまでのことを後悔した。

小学生に上がる前に兄さんは離婚の際に父に連れて行かれることになった。

筋違いにも兄を恨んだりもした。

なんで私とお母さんを置いて行ったのかも思った。

当時は立ち直れないんじゃないかってくらい泣き続けた覚えがある。

それでも時の流れによって少しずつ立ち直ることが出来てきた。

小学生の高学年。中学生の入学式。受験を控えた中学3年生。

たまに兄さんのことをクラスの友達に話すけど、すぐにかかわれる。

私は所謂二次元オタクというやつで陰キヤに属する人間だった。

だからなのだろう。兄がいると言ってもすぐに何かの冗談だと言われることがほとんどだ。

連れてこいって言われたけど、連れてこれるはずもない。

当時意地を張ったせいではばらく狼少女扱いを受けたのは悔しかった思い出。

オタクだったから、私の旦那、とか私の弟、とかと似たような所謂オタク特有の二次元婿として受け取られたところもあると思う。

嘘じゃなかったんだけどなあ……

ちなみにその時期に創刊された漫画で優しい兄が妹を守る男女の王道ラブストーリーに嵌ったりしてたこともある。

その時に子供の頃に仲の良かった兄のことを考えてしんみりしたり……

まあ今となってはどうしようもない話だ。

「兄さんがどうかしたの？」

「……お父さんが忙しくなっちゃったらしくてね」

「？」

何の話だろうか。

いや、そもそも父についてお母さんは現状を知っているのだろうか。

「えっと、手が回らなくなったというか」

しどろもどろなお母さん。なんか怪しいんだけど。

お母さんは嘘をつく時に髪の毛を触る癖がある。

その癖を見せていることから何かしら後ろめたさがあるのは理解できた。

とはいえ内容は分からない。この前ドラマで見た展開を思い出しながら軽く冗談めかした言葉を口にする。

「なに？ 蒸発でもしたの？」

「まあ……」

「はっ。」

まさか否定されないとは思わなかった。

お母さんの顔を凝視する。一瞬しまったという顔をしたけど、その真剣な表情を見る

に冗談というわけでもなさそうだ。

離婚したところから察してもらえるとと思うけど、私とお母さん、兄さんと父は違うところだ。暮らしている。

お母さんは毎月父と兄さんに養育費を払っているが、兄さんと父の顔を見ることは叶わない。

その辺りの話し合いはしているらしく、向こうは面会を拒絶しているらしいけど、自分勝手だと思う。

法律では正義でもそんな傲慢なことがまかり通るのかと。

ただ仕事で稼いで通帳に貯まったお金を相手の口座に振り込むだけの日々。

この無機質な金銭のやり取りが二人の過去になってしまった愛の証だというのは虚しい話だ。

「え、それって兄さんはどうするの……？」

自分本位な人ではあったけど、まさか育児放棄なんて……けど自分でそこまで言ったところで察した。

私たちの家で引き取ろうという話だろう。

親権問題とか色々大丈夫なのだろうか。

「その辺りは大丈夫。弁護士さんも雇ったし……でも雪ちゃんに反対だって言うなら他

の親戚に頼む流れになるけど」

どうかしら？ と不安そうに私を窺うお母さん。

受験を控えた中学3年生という思春期だから色々と気を遣ってくれているのかもしれない。

歳の近い家族が増えるなんてどんな影響があるか分からないし……

「昔は仲も良かったし」

「昔はね……」

兄さんがオタクで陰キャならまだ話せそうだけど。

でもどうなんだろう。もしも明るい爽やかスポーツマンとかだったら話が合う気がしない。

漫画とかアニメの話ならついていけるんだけど、そもそも話で気が合うかどうかさえ分からない。

「んー」

そう思うとどうしても二の足を踏んでしまう。

怖いし不安だ。思い出は思い出のままが一番美しいんじゃないだろうか。

「……いいんじゃないかな？」

だけど気付けばそう言っていた。

お母さんは今までずっと頑張ってきた。

いつも泣いてたし、離婚のときにだって強がってたけど影では凄く悲しんでいたのを私は知っている。

少しでも兄さんの存在が救いになればと思わずにはいらなかった。



「よくなかった……早まった……」

その場のノリに任せた感が否めない。

それに、だ。

私に男の友達はいない。男の人は珍しいから当たり前だと言えば当たり前だけど。そもそも会う機会がない。

正直面倒だ。今更家族が増えるなんて受験の負担にしかない。

私は昔のように接することはできるんだろうか？

ベッドに横になると枕に顔を埋めてしばらくごろごろする。

兄さんがやってくるのは週末という話。思ったより早かったからもしかしたら話は私の想像以上に進んでいたのかもしれない。

私がNOと言ったらどうするつもりだったんだらうか。

だけでももう賽は投げられている。

今更あれこれ言うことはできないだろう。

スマホでLINEを開いてグループメッセージを送信した。

《雪》『こんにちはー』

チャットで挨拶をするとすぐに返信がやってくる。

どうやら二人ともいたらしい。

ちなみに《雪》というのが私だ。

《雪》『相談があるんだけど』

このLINEグループというのが仲の良いリアルな友達同士で作ったチャットの場合だ。

『なにになに?』『真面目な話っすか?』と反応がやってくる。

二人とも基本的におちやらけてるけど相談には真摯に答えてくれる。

根が真面目だから変に茶化さないと信用できる。

ちなみに兄がいるということを嘘と決めつけずに信じてくれたのがこの二人だった。

《雪》『前に兄さんがいるって話したと思うけど』

《優香》『ああ、例の』

《セン》『お兄さんがどうかしたつすか？』

《雪》『小さい頃に両親の離婚で疎遠になっちゃってね』

《優香》『いきなり重いw』

《セン》『導入でお腹いっぱいなんすけど……』

そこでこれまでの経緯を話す。

父親が蒸発したから、週末から兄さんと一緒に暮らすことになったこと。

どう接したらいいか分からないこと。

やっぱり男の人だから気難しいのかなと不安に思ってること。

お母さんには話せなかったことも全部話した。

《優香》『まさかそんなことになるとは……うらやますいー』

《セン》『あれ？ 目から血が……』

《優香》『血涙は草』

やっぱり羨ましがってる。客観的には私も羨ましい立場だとは思う。

優越感を感じつつも同時に不安にも思う。

兄さんが私にどんな感情を持つてるかなんて分かりようもないし。

《セン》『お兄さんってどんな人なんすか？ 私達みたいな陰キャ勢なら少しは話せ
そうな気もするんすけど』

《雪》『昔は優しかった気がする』

《セン》『昔は』

《優香》『昔ってところがポイントだね』

思春期というのは繊細なのだ。

不安でしょうがないし、だけどほんの少しだけその逆に仲良くできる展開だって私は
期待してしまっている。

どんな人なんだろう。筋肉質なイケメンとか、シヨタ系お兄さんとか、ちよつとオラ
ついでる俺様系の兄さんとか……

個人的には優しくてちよつとエツチな感じの人だと嬉しい。無自覚系エロというか。
ただどここれは思春期の中学生が見せている儂い願望だというのも理解している。

リアルにそんな人は存在しない。いや、いるのかもしれないけど絶滅危惧種よりも珍
しいと思う。

その時ノックをされた。誰……ってお母さんしかいないよね。

「なに？ どうしたの？」

「掃除お願いしたのに全然やってないから忘れてるのかなって」

「あー……うん、今やる所だったから」

ほんとに？ と怪しむお母さんから雑巾やら掃除機やらを受け取って階段を降りていくのを見送る。

ごめん、本当は忘れてた。面倒なことはついつい後回しにしてしまう。

私はもう一度スマホを手に持ってLINEを送った。

《雪》『はー、やだやだ。面倒臭いよ』

《優香》『またそんな強がっちゃって』

《雪》『強がってないから。アニメとかだと羨ましいって思えるけど、当事者だところというの結構負担だよ？』

《優香》『気持ちは分かるけど話してみないことにはね』

《セン》『案外上手くいくかもしれないっすよ』

《優香》『もしかしたらワンチャン凄く優しくて妹のことが大好きなシスコンお兄さんというパターンもあるかもしれないし』

どこの二次元だろう。というツツコミは野暮なのかもしれない。

《セン》『そんな展開あるっすか……？ シスコンとか二次元限定な属性だと思うんすけど』

《優香》『ごめん』

《セン》『謝罪が早いっすw』

賑わい始めたけど、お母さんにもう一度声をかけられる。

私はそろそろ隣の部屋を掃除しないといけないからということでもスマホの電源を落としました。

気は少し紛れたけど……不安はまだ拭えない。

隣部屋は今までは物置だったんだけど、兄さんが来るということでも空けないといけない。

荷物を運び出したり、濡れ布巾で綺麗に掃除したりと忙しい。

(なんで私がこんなこと……)

今日はオンラインゲームでレベル上げしようと思ってたのに。

ぶーぶーと内心で文句を言いながら掃除する。

希望的なことは考えたけど、現実的に考えたらあり得ないと思う。

だったらやっぱり兄さんは昔とは違ってしまっているのだろうか。

私は兄さんのことが大好き"だった"。正直今では感情が擦れてしまっている。

子供の頃のことだから薄っすらとしか覚えていないし……

それに昔の優しかった兄さんが変わっているかもしれない。

また兄さんと同棲する……同じ関係にもう一度戻れるのだろうか。

仲良くできるのだろうか。

(やっぱり早まったかな……)

期待も勿論あるけど、不安の方が大きい。私はお母さんとの会話を今更になって後悔し始めていた。

第2話 控えめに言って天使

兄さんが来るのは今日の昼頃という話だけど、時間が近づくにつれて少しばかりソワソワとしてしまう。

リビングのテーブルで麦茶を飲む。

冷たい飲み物が喉を潤すけど、すぐに緊張で乾いてしまう。

気付けば500mlのペットボトルの中身はかなり減ってきていた。

お母さんが心配そうに声をかけてくる。

「まだ緊張してるの?」

「そりゃ少しはね……今更どんな顔すればいいのか分からないし」

「前はいつつもくつついてたのに」

「いつの話……?」

「前というか昔だよ。」

それ幼稚園児くらいの時の話だと思うけど。

「大丈夫よ。何度か顔合わせはしたけど気も遣えて凄く優しい子だったから」

「ほんと……？」

訝し気にお母さんを見る。

私に気を遣ってる……とかではなさそうだけど……

やっぱり実際に話さないと分からないよ。

「そういえば迎えに行かなくてもいいの？」

「タクシーで来るらしいわよ。迎えはいらないって」

「ふーん？」

LINEで友達の二人に相談していたけど、時間が近づくにつれて落ち着かなくて今ではスマホの電源を落としている。

また仲良くできると嬉しいけど、オタクな私に何が話せるというのだろう。

あ、今週のジャンプが合併号の都合で土曜日に発売だったからその話ならなんとか……いや、男の人がジャンプなんて読むのだろうか。

一応話題合わせとして興味のないニュースや政治事情とか、ファッション誌とかも調べたけど、よく分からなかった。

「男の子だからあんまり構っちゃ駄目よ？ 環境が変わって不安だろうし」

「最近はセクハラ問題とか深刻になってきてるもんねー」

兄妹間でのセクハラとか笑えないよね。

ご近所からどんな目で見られるか……

あとお母さん？ 環境が変わって不安なのは私も同じなんだけど。

それを伝えたところお母さんは

「女の子なんだから我慢しないとね」

と言っている。

そうかもしれないけど何となく納得いかないような……

「すごいイケメンだったからビックリすると思うわよ。襲わないようにね？ お母さ

んも思わずその場で」

ごめん……聞きたくない。

何を言っているのだろうか。

私は内心ドン引きだよ。

あとお母さんのその発言はハラスメントにならないの？

「お母さんもおばさん化してきたよね」

「これでも職場では若いですねって言われるのに」

「はいはい」

まあ20代と言われても通じると思うけど……

それより何を話すかだよ。結局話題なんて一つも浮かばないし。

あ、兄妹婚についてテレビで言ってたからその事とか……うん、完全にセクハラだね。ごめん。

妹からそんなこと言われるなんて気持ち悪いだろうし。

兄妹婚に肯定的な人ならまだ平気だとは思うけど、初日はこれに関しては何も言わないほうがいいかな。

地雷だった場合のデメリットが大きすぎる。

兄さんとこれからギスギスしてしまうんじゃないかと思うと不安だ。不安すぎて胃がキリキリする。

今時の男の人ってどんなことに興味があるんだろうか。

(ハア、憂鬱だ)

……今から考えてもどうにもならないよね。勉強でもしてようかな？

最近はずっと遊んだり、兄さんを迎える準備で宿題に手をつけてなかったし。

「何かこの時間不毛な気がしてきた……勉強してるから適当なところで呼んでよ」

「え？　ちよつと」

そこで立ち上がったんだけど、その時にインターホンが音を鳴らした。

……タイミングが良いのか悪いのか。

私は傍に置いてあったお母さんの手鏡を借りて身嗜みを整える。

それまでも何度か鏡を見てはいたけど、もう一度チェックした。

髪の毛は……うん、跳ねてない。肩甲骨辺りまで伸ばした髪の毛。美容院にも行って整えてもらったし。

服装は淡いブルーのスカートに上は桜色のチュニックシャツ。

ネットで調べて異性にモテそうな格好のものをどうにか見繕って組み合わせたけど、大丈夫……たぶん。

これから一緒に暮らすんだからいつも通りの格好でいいとは言われたんだけどね。

いやいや、無理だから。年頃の思春期女子に男の子を意識するなど無理だから。

普段オシヤレなんてしない私だし、お小遣いも半分以上消し飛んだけど、その甲斐はあったと思う。

こういうのは初手が大事だからね。兄とはいえ舐められるわけにはいかないのだ。

「雪ちゃん？」

分かってる分かってる。そんな急かささないでほしい。

これでも緊張してるんだからね。

玄関口の方からお母さんが私を呼ぶ声が聞こえてきたので、急いでそちらへと向か

う。

玄関では荷物鞆を持った人影とお母さんが立っていた。

え……？ という言葉は私の口から出たものか、あるいは心の声だったのか。

幸いにも二人はそれに気付いた様子もなく会話を続けている。

「お世話になります」

「こういう時はただいまでいいのよ？ そんな他人事みたいなこと言われると寂しいわ」

控えめに言って天使だった。

とても綺麗な人でテレビで見えるアイドル何かよりも並外れて美しい人。

歳は同じか少し上くらい。この人が兄さんだ。面影はあった。

だけど時の流れで成長した姿は思わず息を呑むほど美しい。

ジーンズに半袖というありきたりな格好も私から見たらとても艶っぽいし、立っているだけの装いは堂に入っており、気品さえも感じられた。

「そうですか？ じゃあ……ただいま。母さん」

お母さんは満面の笑みで兄さんを出迎えた。

整った美顔が優しく微笑む。スツと通った鼻梁に垂れ気味な目尻がさらに彼の雰囲気
気を柔らかく演出している。

あ、あれえ？ この人血が繋がってるんだよね？　なんか同じ血筋とは思えないんだけど……

というか、ま、待って。

こんなに美人だなんて私は聞かされてないんだけど……

その人の目を見るだけでドキツとした。

とりあえずそこで私も顔を出して駆け寄った。何故か手足が同時に出てしまう。

(つ………な、何してるの……落ち着いて私)

この人はいつも遊んでた兄さんなんだから、意識するとか今更過ぎる。

二人の意識がこちらに向けられたのを感じたから何でもない風に挨拶をした。

「あ、こんちあ………」

し、失敗した。

声は自分で思った以上に出なくて尻すぼみ気味に消えていく。

恥ずかしさで頬が火照り、羞恥で視界が滲む。

「もしかして雪？」

名前を呼ばれて心臓がドキツと跳ね上がった。

兄さんはジツと私の姿を見てくる。

顔から少しずつ視線を下げて足元まで、そこからもう一度視線を戻す。

「あの……う？」

その時間が少しだけ長く感じられて、もしかして私の装いはどこかおかしかったのだろうかと不安になってしまふ。

鏡で何度も確認したし大丈夫だとは思うけど……

兄さんが私を眺めることしばらく。

柔和な笑みを浮かべた兄さんは魅力的な表情のままにこちらに身を乗り出してきた。

「久しぶり。綺麗になったね。これからよろしくね」

「……っ」

ほ、褒められた……！ 綺麗って、男の人にそんなストレートな賛辞を言われたことがないからビックリした。

気付けば手が届くような距離にアイドルよりも格好いい兄さんの顔があった。

黒い宝石のような瞳が無邪気な子供のように私を見つめてくる。

兄さんのご尊顔を見るのが照れ臭くて、かあ、つと顔が熱くなるのを感じた。

いや、このままじゃ駄目だ。内心で喝を入れる。

こういうのは最初が肝心なの。第一印象で堂々としないと……

「部屋……っ、案内しますー！」

今度は思った以上に大きな声が出てしまふ。

一瞬頭が白くなった気がした。

うぐつ、どうしたんだ私。さっきから全然自分自身がコントロールできない。

兄さんはくすくすと笑う。だけど嫌な感じは全くなくて、その顔に見惚れていると「大丈夫だよ」と、手を握ってくれた。

「へ？」

て、手を握られた？

何それ凄い。男の人から握るとか少女漫画みたい。

兄さんって思ってたよりガードが緩い人？

思わず身体が硬直するけど、振りほどくのも失礼だろうと言い訳をしてその手の感触を堪能した。

とはいえこんなゲスな下心がバレたらどうなるかなんて分かり切っている。

気付かれないようにしなくては。

「緊張してる？ 僕も同じだからおあいこだね」

手のひらから伝わる兄さんの熱が心地良くて思わず握り返した。

あ………なんというか、いい匂い。花みたいな香りがした。

細身だけど男の人の力強さを感じられる。

昔は………それこそ泥だらけになって遊んでた頃はそんなに意識したことなかったの

に。

今ではハッキリと目の前の人が『あ、男の人だ』って分かっちゃった。

背も伸びている。私が155くらいだから……たぶん兄さんは170はある。

最後に見た時よりもおっきい。近づいているからその差を更に鮮明に感じてしまう。

やっぱり兄さんも男の子だ。その事実には頭の奥がぐらくらした。

頭のとっぺんから爪先まで熱くなつた気がして俯いてしまう。

だけど強く握られた手の感触が私を現実に戻した。

「悠くんの部屋は2階よ。雪ちゃん、お願いね」



ぎこちない、気がする。

兄さんは兄さんで何も喋らないし、警戒してるのか緊張してるのか、あるいはその両

方か……

そういえば私も話題提供できてないことを自覚する。

それからというもの何か言うべきかと悩むけど、男の人と喋った経験が無さ過ぎること
とが足を引つ張る。

結局私からは何も言い出せずに場は無言のままだった。

こつちが一方的に思ってるだけかもしれないけど、階段を上がる足音が聞こえるだけの
時間が嫌に長い。

野良猫を思い出す。猫って警戒してる時つて凄くこつちの顔を見てくるんだよね。

今の兄さんもそんな感じだ。何が楽しいのか視線を凄く感じる。

こんなので上手くいくのかな……

私は自分が感じている居心地の悪さに気付かれないように深くため息を吐いた。

ただ、少しだけ私が思ってたよりは悪い人じゃなさそうだった。

だから出会う前よりも兄さんと仲良くしたいと思ってる。

でもそれは下心とか異性としての感情だと思うから兄さんには気付かれないように
隠さないといけない。

よし、気持ちを入れ直した。もう大丈夫。

「こつちが兄さんの部屋、です」

物置ではあったけど、掃除の甲斐もあつて埃すらない。

とはいえ家具は後で運び込まれる予定だから殺風景だ。

兄さんは荷物鞆を下ろしてこれまたイケメンボイスでお礼を言ってくれる。

「……………?!」

兄さんがぱたと襟元を仰いでいるのを見て視線がそちらにいつてしまう。

(ちよ、こ、これはさすがに……)

う、うーん。こういうのって注意したほうがいいのかな。

でも男の人にそれはセクハラになつてしまふんじゃないだろうか。

それになんて言えばいいの？ もっとお淑やかに……初日で馴れ馴れしいかな？

だけど兄さんが無防備すぎて理性がゴリゴリと削られていくのは、私の精神衛生上では非常に宜しくない。

「？」

兄さんが不思議そうに私を見る。

気付かれたのだろうかと不安になる。罪悪感もあり顔を逸らした。

というかこれに関しては何かが悪いのでは……？

「あの、分からないことがあつたら、何でも聞いてください」

「うん、ありがとう。何かあつたら頼らせてもらうね」

そう言つて荷解きを始める兄さん。

社交辞令かもしれないけど、何となくむず痒くて、少しばかり口元が緩んだ。

さつきまでの妙な緊迫感も私の中で薄れるのを感じた。

それでもいつまでも私が居たんじや兄さんも落ち着かないだろう。

私はすぐに部屋を出ようとする。

「あ、雪」

呼び止められる。

なんだろう。何か粗相をしてしまったのだろうか。

「昔みたいにお兄ちゃんって呼んでくれないのかな？」

「え……」

「ああ、ごめんごめん。ちよつと気になってき。好きなように呼んでくれていいよ」

「あ、うん……」

兄さんはそう言って荷物を取り出し始めた。

私はそそくさと自室に戻ってしまふ。

愛想がないって思われただろうか。

鍵をかけたのを確認すると部屋のベッドにダイブすると布団をかぶつてゴロゴロと

転げまわつた。

兄さんつてもしかして……い、いやいや、さすがにそれは考えすぎじゃ……

でも、兄さん私に対して優しすぎないだろうか。

最初は気が動転してそこまで気が回らなかつたけど、普通妹の手なんて握る？

仕方のない人だ。私じゃなかつたら怒られても不思議じゃない。

まあ、悪い気はしなかつたけどね。なんて言いつつ口元の表情筋はピクピクと歓喜に震える。

思っていたよりは邪険にされてないし、お母さんの言うように優しい人という評価は正しかったらしい。

今時の男の人としては珍しいけど、私としては有難いし助かった。

とりあえず友人たちから助言を貰うべく私は再びLINEを開くのだった。

第3話 私のこと好きなの？

「テレビつけていい？」

二人の返事をもらってリモコンの電源ボタンを操作する。

夕食時だけど、食器の音だけが聞こえる空間というのも気まずいだろうし。

だけどその心配は杞憂だったみたいで、兄さんを含めたこの場の空気はとても穏やかに進んでいく。

『女が勘違いする異性の行動とは!?!』

テレビにどどん！ とカラフルな太字のテロップが流れて、しばらくすると画面向こうでは芸人がVTRを再現する。

消しゴムを拾われて「この人ももしかして？」みたいな分かり易い例から始まった。

私はここまで簡単に即落ちはしらないと思うけどな。

いや、意識するきっかけとしてはありなんだろうか？

「あ」

テレビに気を取られていたせいでソースに手を伸ばした兄さんと手が重なる。

肉の薄いごつごつとした男の手にドキツとしつつも、思い切り手を引いてちよつと過剰に反応をしてしまう。

「ごめん、ソース使う？」

「いえ……お先どうぞ」

この会話のきこちなさについて捕捉したい。

最初に言っておくと決して兄さんのことは嫌いじゃない。

仲良くしたいとも思ってる。ただいきなり距離を詰めることができないだけなの。

その必要があるのは分かっているけど、いきなり仲良くなれると思う？

つまりこの何とも言えないような微妙な距離感はどういうことなのだ。

お母さんのご飯の食べ方がいつもより綺麗に見えるのは恐らくは気のせいじゃないはず。

私も意識してるしね。

兄さんの方はどうか分からないけど、私は食べ方が汚いとかで幻滅されないかが怖い。

咀嚼の音も普段は気にしないのに今日はやけに気になってしまう。

「それにしても大きくなつたね〜お母さんビックリしちゃった」

「一応もう高校生ですからね。最後に会ったのが小学校にあがる前でしたっけ？」

お母さんと兄さんが夕食の席で談笑している。

今日の夕食はハンバーグをメインにしたメニユーだ。

兄さんも一緒に手伝つたらしいけど、美少年様の手で作つた料理だと思つたと心なしかいつもより美味しく感じる。

男の人が料理できるつてあんまりイメージはないけど、お母さんは有難がつていた。だけどその際にプレッシャーを与えられた私としては複雑。

というか何もしてないわけじゃないし、私だつてお皿運んだから。

「小さい頃と比べるとギヤツプがあるわよね」

ギヤツプ萌えとでも言いたいのだろうか。

オタク用語だけど兄さんに伝わるのかな。

勝手なイメージだということを承知で言うけど男の人はもつと気難しいものだと思つていた。

割合男の人は10人に1人もいないし、女の人を下に見る傾向があるとも聞いたことがある。

もしかして兄さんはSSR級に好物件な男性なんじゃないだろうか。

付き合ってる人とかいるのかな、と考えた辺りでモヤモヤと気持ち悪い感情が渦巻いたのでやめておいた。

「何センチくらいあるの？」

「身長なら173ですね」

「わ、すごい」

兄さんそんな大きいんだ……

体格も痩せすぎというわけじゃないし白くて健康的な高身長。

高1ならまだ伸び代はあるだろうし、スペック高すぎないだろうか。

あとなんでお母さんは普通に話せてるんだろう。

日常が変わったことの違和感が強いのと兄さんの顔面偏差値の神々しきで私はまだ少しだけドギマギしてる。

目に掛からない程度の黒髪がやけに輝いて見えた。

「雪も驚いたんじゃない？」

「えあ？」

急に話を振られて反応できなかつた。

兄さんは穏やかに笑ってるし、お母さんはあらあらと呆れている。

照れ隠しに付け合わせの野菜を口に運んだ私を見て兄さんが言う。

「そのニンジンのグラッセ僕が作ったんだけどどうかな。火ちゃんと通ってる？」
あ、そうなんだ。

言われてみればうちのハンバーグに付け合わせの野菜って珍しいなとは思ってた。いつもはレタスとかブロッコリーを適当に置いて終わりだから。

お母さんが見栄でも張ったのかと思ってたけど、兄さんが作ったんだ。

「悪くないと思いますよ」

照れ臭くて上から目線で評してしまった。

兄さんは気にした様子もなく「そっか」と嬉しそう。

「雪ちゃんはお皿運んだだけじゃないの」

「いやいや、それも立派な家事の一つだよ」

お母さんがあれこれ言うってくる。

この流れは不味いかもしれない。また余計なことを手伝わされる展開かも。

だけど意外なことに兄さんの方からフォロワーがやってきた。

「お手伝いするなんて偉いね。いいお嫁さんになれるんじゃないかな」

「べちゅに」

……囁んだ。食卓が変な空気になってしまったので仕切り直す様に咳払いを一つす

る。

ただ返事は凄く素っ気なくなっちゃったけど内心は驚きがあった。

決して嫌ではないんだけど相手を立てるのは男の人としては珍しいというか、誤解されそうな行動だ。

というよりお嫁さんって……人工授精が主な今どきの女子がお嫁さんに何てなれるんだらうか？

だけど相手は男の人だ。その辺りの機微には疎いんだらう。

私は兄さんの機嫌を損ねない程度の言葉を最低限に返していく。

すると兄さんはそれも気にせず「話は戻るけどさ」と言っ続けてきた。

「僕も驚いたな。雪が凄く綺麗になってたからさ」

「っ！」

し、社交辞令だよね……？

落ち着こう。男の人からの好意を誤解して「え、私のこと好きなの？」なんて黒歴史あるある過ぎて笑えないし。

さつきのお嫁さん発言といい今回のことといい兄さんは迂闊だ。

「母さんに似てるから美人ですよね」

そして忘れないうちに兄さんがお母さんにもフォローを入れた。

角が立たないようにしてくれただと思う。

嬉しそうにするお母さんだったけど、もしかして父のことでも重ねているのかもしれない。

何となく居心地が悪かったので、急いで残り少ないハンバーグを口に運んだ。

「悠くんも雪ちゃんのこと大好きだったもんね」

男の人と夕飯を一緒にするという場面で気分でも高揚しているのかお母さんがそんなことを口にする。

私はといえばむせ返った。

「ごほごほと咳をしながらお茶を飲み干す。

ちよつ、お母さん!？」

だからそんな昔のこと持ち出されたら兄さんだって困って——

「それは違いますよ」

「う……」

ほ、ほら……違うらしい。年頃の男の人にそんなこと聞いたってこうなるに決まっている。

兄さんのハッキリとした物言いに、時計の秒針の音がやけに大きく響いて聞こえる。仕方のないことだとは思う。でも、そんなすぐに否定しなくても……

ちよつとだけ気が重くなった。

お母さんも少し「あー」と気まずそう。

私自身もさつきまで兄さんを見てはしゃいでた気持ちがどんよりとしてしまう。

だけどこれはお母さんが悪い。少しは反省してもらわないと。

兄妹でとか漫画の中だけだと思う。

気にしてなかったと言えば嘘になるけど、どちらにしろこれでその可能性は完全に潰えてしまった。

「ほ……ほらね？　お母さんもはしやぎすぎ。兄さんもごめんなさい。困らせちゃった？」

「ああ、違う違う。その“だった”って言い方だと昔だけってことになっちゃうからさ」
「……………？　ツ!？」

一瞬意味が伝わらなかつた言葉の意味を理解した瞬間、私の顔がエアコンで涼しい部屋の中とは思えないほど熱くなる。

心臓が跳ね上がった。私は言いたい疑問を全部抑えて口を噤んだ。

「え、悠くん、それってつまり今も」

「っ！…ぐ、ぐ馳走様！　お風呂入ってくる！　沸いてるよね！」

お母さんを遮って私は立ち上がった。

答えを明確にすることを恐れたのは、関係が変わることへの恐怖だったのか、それとも期待だったのか……

「さっきタイマー鳴ってたから大丈夫だと思っけど」

不満そうなお母さんだけど、私は無視した。

(落ち着こう。冗談……これは冗談)

兄さんも兄さんだと思う。そんな風に揶揄われて面白いとは思わない。

食器を水に浸けて、兄さんを睨むと「ごめんごめん」と柔らかく笑っていた。

ほら、やっぱり悪ふざけだった。

何か今日一日で兄さんの性格が何となく分かってきた気がする。

だけどお風呂場に向かう途中で、最初は兄さんに譲るべきだったかもしれないことに思い至った。

兄さんを見るけどその顔に悪感情は見られない。

特に順番に拘りのない人なのかな？

私がシャワーで済ませてもよかったけど、日本人として湯船には浸かりたいから有難かったかも。



身体を洗って湯船に浸かりながらこれまでのことを思い返す。

意外と上手く回りそうで一安心、かな？

お風呂場に設置された防水性のデジタル時計には19時27分と記されている。

そういえば見たかったバラエティが始まるのは20時だったか……なんてことも考えた。

兄さんは自室でのんびりするのだろうか。リビングで一緒に見たい気もするけど……

明日はクラスの友達にも自慢できる。そのことに癖になりそうな優越感を感じた。

お湯を掬ってばしやつと顔に当てる。

「ふ〜」

お風呂は魂の洗濯とも言われているけど、上手いこと言う人がいるんだなと感嘆している。

言い得て妙だ。今まさに一日の疲れが洗い流されているようだった。

その時扉越しに脱衣所に影が見えた。

お母さん、ではなさそうだった。影から推測する背の高さを見るに兄さんだろう。

「雪？ 今いいかな」

低めの声のトーンがお風呂場に反響する。

「兄さん……？」

さすがに入つてこないとは思うけど、鍵もない浴場の扉一枚だけで隔てられてるのはどうにも落ち着かない。

自分の身体が緊張で強張り、扉が頼りなく感じられてソワソワする。

ちよつとだけ警戒気味な声が出た。

「なんですか？」

「うん、間違つてたらごめん。雪の態度がちよつと素っ気ない気がしたから」

私は何も言い返せずに押し黙った。

お母さんは受け入れてたけど、私はまだ心の準備ができていない。

兄さんにも伝わってしまったようだ。

なんて言おうかと、少しでも気まずい沈黙が場を支配する。

でも兄さんはその空気を察したのか扉越しに慌てた声が聞こえてきた。

「いや、それはいいんだ。いきなりだったと思うからさ、ごめんね？」

兄さんも気を遣つてくれている。

自分だって父親に見捨てられて辛いはずなのに、そんな素振りも見せずに……
……嫌気はしなかった。

「……別に、兄さんが謝ることじゃないですよ」

「何か敬語使ってくるし」

いや、それは別にいいんじゃない。

だって今のところ兄さんの印象って兄というより年上の男の人ってイメージが強い
というか。

タメ口は落ち着かない。それはたぶん私がまだ兄さんを家族として受け入れること
ができてないからなのかもしれない。

「でもこれだけは言っておきたいんだ」

兄さんは改まって言ってくる。

「また昔みたいに仲良くしたいな」

なんだろう。なんか……こういう時に場違いな感想かもしれないけど、無性にキュン
とした。

悪い気はしない。それどころか凄く嬉しい。

兄とはいえ男の人にそこまで想ってもらえた女なんて早々いないと思うし。

「……うん」

し、仕方ないなー兄さんは。

顔が緩むのを抑えられない。ちよっとお湯につかり過ぎたせいで顔が熱い。

兄さんはたぶん異性として言ってるわけじゃないと思う。

そうだとしたらさすがに危機感無さ過ぎるし。

兄さんが言ってるのは家族としてだ。

「それこそ昔よりも」

「うん、私も……うん？」

おかしい言葉が聞こえた気がする。

私は咄嗟にそちらを見る。兄さんがどんな顔をしてるのかは窺えない。

「入っていい？ 昔みたいになさ、一緒に入ろうよ」

「え、ちよ」

「駄目？」

え、なにこの、え？ 何この展開。

私は思わず生唾を飲み込んだ。

ちよっとエツチな漫画ではよくある展開だ。

主人公の家に居候することになった無自覚エロスなヒーローがお風呂に入っ
て背中を流す。

まさか現実に起こり得るとは……私は感動と興奮でどうにかなりそうだった。目を回し、よく分からない断わり文句を口にしてしまう。

「えっと、あの、だ、駄目じゃない、けど……でも、胸小さいし、あ、あの、こういうのつてやっぱり結婚してからとか……」

「ああ、うん。それもそうだね」

そうして遠ざかっていく気配。

私の口から未練がましく「あ……」と声が漏れ出てしまう。

意外なほどあっさり引いていく兄さんだったけど、もしかして冗談だった？

そして、それはそれとして自分の先ほどの発言を思い出す。

駄目じゃない。こういうのは結婚してから。とかなんとか。

というか胸が小さいからって何!?

(な、なんか我ながら気持ち悪いことばかり言った気がする……)

どもってたし、あまり認めたくはないけど処女丸出した。

というか胸は成長途上だから……同年代の平均よりは大きい方だし。

しかしさっきの反応は完全にやらかした気がする。

顔どころか身体中が熱い。

(変な子だって思われた……)

どうしよう……少しのぼせたかもしれない。

まさか兄さんがあっさり引いたのって私の反応があまりにも気持ち悪かったから、とか……

違う。これも考え過ぎだ。とはいえ確証はないので余計に悶々としてしまう。

頭の中は後悔と、もしあのまま受け入れていたらという妄想で一杯だ。

くつ、冗談にしては悪質すぎる。

思春期少女の心を何だと思っているのか。

兄さんは将来魔性の悪男にでもなるつもりなの？

いや、そうじゃない。

問題はそこじゃなくて――

(今の「昔よりも」って、どういう意味だろう……)

お湯に顔ごと浸かってブクブクと泡を出す。

兄さんって本当に私のことが……いやいや！ 何言ってるの！

煩惱を振り払って今後の事と素数について思いを馳せた。

彼氏いない歴〓年齢の私には先ほどの思わせぶりな言葉は理性を揺さぶるには十分すぎたからだ。

私はしばらくお風呂場で悶えると、もう一度髪の毛をお湯で濯いだ。

なぜか意味もなくもう一度シャンプーをしてしまい、自分でも分かり易く動揺していた。

(いや、まさか……そんなことってある？ 兄さんが妹の私をずっと好きだったとか……)

わ、分からない。

分からなさ過ぎてどうしたらいいのか全く分からない。

だけど自分だけで思いつく可能性は一つだけしかない。

とりあえず明日あの二人に聞いてみるとしよう。

もしかしたら何か名案を聞けるかもしれないし……

第4話 とりあえず相談してみる

起きてから洗面所で顔を洗う。

まだ学校まで時間があるのに寝癖を完璧に直したのは、あの天然な兄のことを意識してしまったからだろう。

というか今朝兄さんに凄く起こされ方したんだけど……

起きないと悪戯しちゃうぞ？ って言われたし。悪戯とは……？

リビングへと向かい、恨めし気に兄さんを睨んだ。

「おはよう、雪」

「……おはようございます」

だけど兄さんはどこ吹く風だ。

相変わらずほんわかとしてる。

お母さんはキッチンで朝食を作っていた。

「月曜日は面倒だね。ずっと寝てたいよ」

「そうですね」

会話は広がることなく、そこで終わってしまった。

咄嗟にしまったと思う。

広げたほうが良かっただろうか。

胸の内では焦りを覚えるけど、男の人に何を話せばいいのかわからない。

とりあえずコップに牛乳を注ぐ。

すると兄さんの方から違う話題を振ってもらえた。

「学校さ、途中まで一緒に行かない？」

牛乳がこぼれそうになった。

パーソナルスペースって知ってる？ と全力で言いたくなる。

絶対この人学校でも誤解されてそう。

「初日だから緊張しててさ」

そういうえば兄さんは引越してきたばかりだったか。

言われてみれば少し緊張してるように……は、見えないけど、本人がそういうならそ

うなんだろうか？

いや、正直あんまり動じてない気がする。

「……私は別にどっちでも」

言つてからちよつとだけ詰まつてしまった。

魅力的ではある。

ただそれでも軽々しく頷くようなことをしなかったのは強がりだったのかもしれない。い。

だけど兄さんは私の言葉を受けてどう思ったのか、こんな言葉が続けてきた。

「駄目かな？ 今日はやめとこつつか？」

「え……」

自分でもハッキリと分かる名残惜しさを滲ませて言葉を窄ませてしまった。

思わず兄さんを見る。

そこでは兄さんが少し目を伏せて朝食を口に運んでいた。

どつちつかずな私の態度を慮つて気を遣つてくれたのかもしれない。

私は強がる感情を引つ込めると慌てて口を開く。

「だ、駄目じゃないですよ……」

嫌じゃない。

まだ兄さんを家族として受け入れることに抵抗はあつたけど、それは決して嫌悪からじゃなかった。

昔みたいに仲良くしたいというのは私だつて同じ。気難しい男の人に邪険にされる

かもという不安は既に今更だ。

とはいえそれを実際に口にするのは憚られた。

なんか自分が段々兄さんに籠絡されていつてるみたいで複雑だったから。というか最近自分がちよろく思えてきた。意識し過ぎでは？

だけどキツチンから聞こえてくるお母さんの声で現実に戻される。

「あれ？でも悠くん今日は転校初日だから時間違わないっけ？」

それを聞いて兄さんが「あー」と、曖昧に声を零した。

登校時間が違うということだろうか。兄さんもそれを否定しなかった。

兄さんは「そうだった」と、続ける。

「一緒に行くのはまた今度だね」

この人もしかして私をからかって楽しんでないだろうか……



中学校の廊下を注意されないぎりぎり程度の早足で進んでいく。

教師がこちらを見てくるけどすぐに、まあいいか、というように私への興味を失った。そして見えてきたのは3年生の活動圏内。A、B、Cと並んでる。

私はAクラスなので右端の教室だ。

(二人とも……いるかな)

兄さんが来てから非日常感が凄い。

今朝なんてお弁当といつてらっしゃいをセットで渡されたし。

え、なに？ 私たち新婚なの？

普通なら違う、と否定するところだけど、あまりにも兄さんの行動が自然過ぎて私の方が間違ってる気がしてくる。

というか中学校って普通は給食なんじゃないだろうか。今どきお弁当の中学って珍しい気がする……なんて、関係ないことを考えるのもある意味現実逃避。

学年が上がってからお世話になり2か月程の教室の扉を開けると、そこには3―Aクラスの面々が揃っていた。

一瞬だけクラスメイト達の意識がこちらへと向けられるけど、すぐに教室の空気は元に戻った。

クラスでも大人しい私は活発に交流をするようなタイプでもないしね。だけど今だけは皆がいる安心感が凄かった。

億劫だと思っていた学校への登校がまさかこんな風に心安らげるものだと感じるようになっては……

とにかく今は兄さんからの誘惑？ の対策を練らないといけない。

教室の中は半分以上は埋まつてるけど、それでもいつもより早めに出たので席は疎らに空いている。

あの二人は……あ、いたいた。

よかった。微妙な時間だから来てるか分からなかったけど、二人の姿が確認できる。通りかかったクラスメイト達に軽く挨拶をして自分の席へと向かい鞆を下ろした。

「おはーっす」

先に声をかけてきたのはふんわりとした茶髪のボブカット少女の仙波シジミだった。ちなみにLINEのやり取りをしていた《セン》は彼女だ。

人懐っこく犬っぽい印象の彼女だが、名前を呼ぶと怒られる。

シジミちゃんって可愛い名前だと思うけど何が駄目なんだろう。

まあ本人が嫌だというならコンプレックスに触れるのはやめておこう。

そんなセンが妙にソワソワと周囲を確認してから聞いてきた。

「どうだったっすか？」

何が、と聞かなくても兄さんのことだと分かった。

私も話したかったし手間が省けたけど、さすがに教室のど真ん中で言える話題でもない気がする。

ここじゃちよつと……と廊下へと向かう。

そのついでに眼鏡をかけた隠れ美少女に声をかける。

LINEグループの《優香》こと篠崎優香だ。彼女も気にしてくれていたのかすぐにこつちにやってきた。

◇

社交的ではない私だけど、仙波シジミ、篠崎優香との二人とは不思議と馬が合った。

こうして悩みを普通に話せる友達がいるというのは、これまで色んな場面で助けられてきたように思う。

場所を移してから前置きなく早速本題に入った。

「私食べられちゃうんじゃないかな？」

学食前の自販機のところ、何言ってるの？ みたいな目を向けられる。

それぞれ好きな飲み物を自販機から取り出したところで私は件の兄さんのことを話した。

朝のHRまであと15分かちよつとくらい。

二人の反応を伺いつつ私は続ける。

「いや、兄さん本当に優しいの。今朝なんてお弁当渡してくれた上にいつてらっしゃいつて言ってくれてさ」

するとセンが「うーん」と首を捻り考え込む。

胡散臭そうにしている。

人を信じやすい彼女のこんな半信半疑な態度は珍しい。

それだけこの話の現実味がないということなのだろう。

でも私が逆の立場でも同じように思っただろうから仕方ないことだとは思うけど

……

優香が気を取り直す様に眼鏡をかけ直して言ってくる。

「もしかして食べられるって性的についてこと？」

優香の一言に、センが「ああ……」と、納得する。

同時に顔も少し引き攣らせた。

「それは完全におばさんギャグっすよ」

「勝手に引かないでよ。いいじゃんちよつとくらい」

ギャグって考えると脳が活性化するんだよ。というのは少し前にやってたバラエ

ティ番組の豆知識だろうか。

って話が逸れた。今回は真面目な相談なのだ。

さっきのはちよつと変なテンションになってただけだよ。

「でもそれなら襲つちやうの間違いじゃない？」

「確かに、性的な意味なら食べられるのは向こうじゃないっすか？」

間を空けて、イチゴオレを飲むと疲れた頭に糖分がやってくる。

いつもはちよつと甘すぎるかなと感じるけど、考え事をしてる時にはこのくらいでちようどいい。

ゴミ箱にパックを捨てるともう一度二人に向き直った。

「違うの、今回はこっちが受けなの……たぶんただけだし、兄さん私のこと好きなんじゃないかって」

家を出る際の早朝の一幕を思い返す。

男の人についてらっしやいなんで言われるとかまだ夢なのかと思っただけだし。

それに昨日のこともある。

どう考えても兄さんは私に気があって誘っているようにしか思えないんだよね。

「ええ……」

「きついつす」

しかし二人の反応は冷ややかなものだった。

兄さんが私に好意を持つているのかもしれないという真剣な相談は、やれやれと呆れた風な反応をされてしまった。

そんな二人にムツとしてしまう。

「だってこの前LINEで面倒臭いって言ってたのに」

「それについては兄さんが私を邪険にしないって前提になるなら話は変わってくるんだよ」

「めっちゃ現金つすね……私たちは雪のことを心配して言うてるつすよ?」

「心配?」

「うんうん、いくらなんでもないと思う。というか思春期あるあるだよそれ」

ああ、つまり後々に勘違いが恥にならないかと心配してくれてるというわけだ。

確かに間違ってたら黒歴史確定だろう。

布団の上で悶え転げること間違いなしだ。

小学生の頃のことを思い出しそうになって微妙に顔をしかめてしまう。

「例えばなんすけど、朝起こしてくれたりとかするつすか?」

そのレベルじゃないと信じられないつすよ、とセンは言うけど、それなら経験済みだ。

「起こしてくれたよ。起きないと悪戯しちゃうぞって言われた」

あれは朝から心臓が止まるかと思った。

一瞬で目が覚めて飛び起きたし。

「お風呂に一緒に入ろうとしてくるとか」

「入っていい？ とは聞かれた」

昨日のことだから鮮明に思い出せるけど、二人の目が更に疑わし気なものへと変化した。

あ、これは完全に信じてないな。

付き合いは中学に入って2年と短いものだけどそのくらいは分かる。

二人は今私の正気を疑ってるんじゃないかな。

「この時点で可能性は3つあるっす」

びし！ と指を3本立ててきた。

何改まって。

まあいいか、聞いてから判断しよう。

私は黙ってセンの言葉を待った。

「一つは雪が狂ったパターンっす」

「だね」

「だね。じゃないよ」

さらりと人を狂人にしないでほしい。

というか本当に失礼なのは。

「冗談つすよ。冗談」

センはそう言つて指を一つ引つ込めた。

ほんとかなあ……なんか冗談半分本気半分くらいに思えた気もするんだけど。

話は進まないから突つ込まないけどさ。

「冗談はさておくつす。次はお兄さんが本当に雪に恋してるパターンつす」

「まあ一番低い可能性だよね」

「つすね」

いや……やつぱり全然信じてないし、この二人に相談したのは失敗だっただろうか。

「次にお兄さんが優しいけど、恋愛感情までは持つてないパターンつす」

「ふむふむ、可能性はありそうだね。雪ちゃんが勘違いしてる展開だ」

なるほど……不本意だけどその可能性はそこそこ高い気もする。

客観的に見たら私の推測は現実的じゃないとも思うし。

沢山の女の人たちに囲まれて生きてきた男の人が女をどう思うかなんて、女性不信になるか女はケダモノだと見下すかのどっちかしかない。

優しいという属性を持つ兄さんは相当なレアケースだ。そこにシスコンという訳の

分からない属性が重なる確率はどれほどのものだろうか。

「でもなあ……」

「あ、待つて待つて。もう1つ可能性思いついたよ。お兄さんが何かしらの思惑を持つて行動してるとかどうだろう」

優香がよく分からないことを言い出した。

……思惑？ とは？

「というと？」

「言っちゃなんだけどお兄さんって今まで他人だったわけじゃない？ だから気を遣って距離を詰めようとしてる、とか？ お兄さんも距離感がつかめてなくてやりすぎちゃってるとか」

「あー、ありそうっすね」

む……一番あり得る気がする。

それだと全部に説明がついてしまう。

「でも兄さんが昔よりも仲良くしたいって言ってたんだけど」

これはどう説明するんだろう。

優香が「ふむ」と軽く顎に手を当てているけど答えは出そうにない。

平行線に思えた話し合いだったけど、しばらくしてから優香が口を開く。

「とうか一度遊びにいつてもいい？」

「うん？　うちに来るの？」

「それもそうっすね。実物見ないことには何とも言えないっすよ」

「ごもつとも。」

「反対意見を出す理由もないし、いいんじゃないかな。」

「どうかな？」

「驚かせる気がする。」

「あの兄さんのことだ。センと優香がいることなんて気にせずまた変な行動をするんじゃないかな。」

「ハグとか……いや、さすがにそこまでのボディタッチはしないだろうか。」

「可能性が0と言いつても切れないのが怖いところだ。」

「でも怪しんでるこの失礼な二人に兄さんを自慢できるのも悪くないかもしれない。」

「……」

「だけど、ふと兄さんがいつもの柔和な顔で優しくこの二人に笑いかける姿を想像して答えに窮してしまった。」

「兄さんが優しいのは私だけじゃないのかもしれない。」

「何となくモヤモヤしてしまう。」

断る理由なんてなかったはずなのに、何故か私は少し嫌だなど思ってしまったている。

二人の友達がもしかして都合が悪かったかと、窺ってきた。

キーン コーン

「つて、やばいつすね。予鈴鳴っちゃったつす。そろそろ戻らないつすか？」

「そだね。雪ちゃんも考えといてよ。テスト勉強もしないといけないから勉強会とかいんじゃない？」

そういえばそんなものもあった。

タイミング的には丁度よかったのかもしれない。

二人と遊ぶのはいつものことだ。

だけど私は返答の言葉を少しだけでもごもごさせてしまうのだった。

第5話 お宅訪問

「雪ちゃんの家に来るのも久々だね」

優香の言葉に最後に来たのはいつだったかと記憶を辿る。

確かにLINEとかチャットとかで話すことも多いからあんまり家に行き来するとかは少なかったかもしれない。

「お兄さんはいないんすかね？」

玄関口を見る限り靴がなかったからまだ帰ってないと思う。

念のため兄さんの部屋をノックしたけど返事はなかった。

「んーどうする？」

「帰ってくるまで勉強するってことでいいんじゃない？」

「建前はテスト勉強っすからね。いいんじゃないっすか」

兄さんの部屋のすぐ隣。二階にある私の部屋へと二人を招く。前日に掃除はしてお

いたからいつもよりも整理はされていて、自分の部屋だというのに心なしか広く感じた。

クツシオンを優香とセンの二人に手渡して早速勉強を……とはならなかった。

「んー……」

「? どうしたの?」

気付けばセンが辺りをキョロキョロと見回していた。

何してるの? と気になり声をかけてもしばらく同じような動きを繰り返している。

「いや、男の人の痕跡とかなーと思ってたんすけど」

「ないと思うよ? 兄さんこの部屋にはほとんど入ってないし」

あると言えば今朝の部屋に兄さんが入ってきて私を起こしたひと騒動だろうか。

あれは心臓が止まるかと思った。

明日も同じような事件は起きるんだろうか……怖さ半分期待半分だ。

寝顔とか見られたのかな……涎とかは……出てたかもしれない。今更になってむず痒いような羞恥心が込み上がってきた。

「相変わらずのオタ部屋だねえ」

「そう……? これでも結構片付けたんだけど……」

「いやあ、私には分かるっす。おそらく……ベッドの下とかにおかずを忍ばせてあると

かじやないっすか？」

残念だけど、私のコレクションはそこじやないよ。

巧妙に隠してあるから絶対にバレない自信がある。

とはいえ好ましい話題でもなかったもので、本題に戻した。

「はいはい、それより忘れないうちに勉強やっちゃおうよ」

「あ、待つて！ このラブピースの一卷初版なんだけど！」

「マジっすか!? すげーっす！ 激レアじやないっすか！ 初めて見たっす！」

……聞いてる？

◇

そうこう言いながらも雑談をしてから始まった勉強はつつがなく進行していった。

一時間も経つ頃には宿題が終わり、それからは各々で苦手範囲の自習だったり、この先習う予定の範囲の先取りをしたりとか。

さらに時間が経てば途中休憩も増えて、弛緩したような空気が漂うようになる。

エアコンで室温は快適な温度を保っているけど、ずっと頭を使っていたから知恵熱が出そうだ。

コップに注いだ飲み物も全員分なくなっていて、氷も完全に溶け切っていた。「疲れたっす……」

んっ、とセンが体を伸ばした。

優香も同じように手首をぷらぷらさせてから眼鏡を拭き始める。

かくいう私もそこその疲労が溜まっていた。

普段自習をサボってたから自業自得なんだろうけど、いざ一度にやろうとすると肩が凝るような感覚がする。

やっぱり勉強はちよつとずつでも毎日やらないと駄目なのかもしれない。たぶんやらないけど決意するだけはタダだろう。

「結構進んだね。宿題も終わっちゃったし」

「証明問題ってどこで役に立つんすかね？ 数学って五教科の中で一番使わなくないすか？」

「どつちかというと理科のほうが将来使わなくないかな？」

何の生産性もない話題だった。

一度集中力が途切れるとあとは坂を転がり落ちるようにすぐで、センは「あー」とクッションを枕に横たわり、優香は問題の文字を追いながらもどことなく覇気がないように見える。

私も人のことは言えないけどね。

センが再び溜息を吐いた……そんなに疲れたんだろうか？

「例のお兄さんとは会えそうにないっすね……」

ああ、そのことが懸念だったのかな。

掛け時計に目をやると、既に時刻は五時を回っていた。

さすがにそろそろお開きかな？ あんまり遅くなり過ぎると二人の家族も心配するだろうし。

「でも帰ってくるの遅いね？ 何してるんだらう？」

確か転校初日と言っていたし、何かあるのかもしれない。

部活動見学とか、校内を見て回ったりとか。

まあ詳しくは知らないから想像になるんだけど、いつ帰ってくるか分からない兄さんの為に二人をこれ以上ここに留めるわけにもいかないだろう。

外を見ると夏場が近いからまだ明るい。とはいえここから少しずつ暗くなっていくはずだ。

ペットボトルに残った飲み物を最後にセンが「貰っていいっすか？」と聞いてきたので「いいよー」と軽く返した。

頭を使うと喉が渇くもんね。

「おかわりいる?」

「んにや、そろそろ帰るとするっす」

「そうだね。私もお暇しようかな」

優香とセンがテーブルの上に散らばった文具やノートを鞆に仕舞う。立ち上がりスカートを軽く叩いた。

無駄足を踏ませてしまったかもしれない。勉強は進んだから無意味とは言い切れないけど、本来の目的は達成できなかった。

何となく消化不良な空気が私たちの間に流れる。

「あ、途中まで送るよ」

「雪はお母さんみたいっすね。大丈夫っすよ」

苦笑しながら背を向ける友人たち。

だけど、私は心のどこかで安堵していたのかもしれない。

兄さんを二人に見てもらえなかったのが心残り……というのは表向きの言葉だ。

本当は安心していた。

だって、兄さんと二人を会せたら絶対変なテンションになるだろうしね。

そういう意味ではこのまま何事もなくというのは平穩でいいのかもしれない。

ガチャリ……

優香が部屋の扉を開く。それに続いてセンも私の部屋から出る——となった時のことだった。

「あ、ただいま」

兄さんだった。帰ってきたばかりなのかブレザーの制服姿。

じつとりと汗が滲んでいる首筋がなんだか艶っぽい。

というか私も不意打ちだった。兄さんの神出鬼没さに心臓が跳ね上がる。

兄さんに驚くのはいつものこと……だけど、初エンカウントの二人の衝撃はそれ以上だったようだ。

世界が止まったと錯覚した。

カチコチと時計の秒針が刻まれる音だけが経過を知らせてくれる。

それに合わせて次第に二人の顔が熱を帯びていった。センは目を見開いている。

優香は完全に止まってて分からないけど、顔が段々赤くなつていつてるから似たような心境なのだろう。

「雪のお友達？ これからも妹と仲良くしてあげてほしいな」

「あ……そつ、そも」

優香は舌が回っていない。

言葉に詰まるあまり噛み噛みだった。

……そも？

「は、はいっすー！」

センは首から上が取れるんじゃないかってくらいブンブンと頭を縦に振っていた。

兄さんがそんな二人の思春期女子特有の気持ち悪さを嫌悪することなく微笑むと、それに衝撃を受けたらしい二人から動揺する気配がこれでもかと伝わってくる。

自室へと戻る兄さんを見送ってから私たちの時間は止まったままだった。

「……………」

気まずいような、そうでもないような、よく分からない何とも言えないような沈黙が流れること十数秒。

そのまま逆再生のスローモーションのようにゆっくりと部屋に戻ってきた。

もう一度扉が閉まる。

帰らないのだろうか、なんて疑問を心の中で投げ掛けた。

「……雪……さん、ちよつとお願いがあるんすけど」

「わ、私もちよつと頼みたいことが……」

「駄目」

内容を聞く前に断った。何となく碌でもないことだと察したからだ。

二人からは露骨に不満そうな顔を向けられるのだった。

第6話 お兄ちゃん

《セン》『せめてお兄さんに聞いてくれないっすか？ それで駄目なら一旦諦めるっす』

《優香》『そうだね。それなら諦めることも……まあそれは置いといて聞いてもらえないかな？』

断言を避けている。

それどころか言葉がフワフワし過ぎていることから、恐らくは諦めるつもりなんてないのだろう。

良き相談相手として兄さんと会わせただけなのに、余計な混乱を招いただけなような……

自分の失敗を自覚して私は内心で落ち込んだ。

《雪》『あの……なんでそんなにがつついてるの？ というか相談に乗ってくれる話
は……？』

《セン》『敵を知り己を知れば、つすよ。なんにしたって話さないと情報が少なすぎ

るっす』

《雪》『何か別の思惑が見えるような……』

《セン》『気のせいっすよー（棒）』

《優香》『ww』

いつもの軽口が飛び交うLINEグループだったけど、私からは力のない笑いしか出なかった。

最近色々と自分の行動と思惑が裏目に出ている気がする。

スマホ片手に親友二人のLINEを見て溜息を吐く私。

どうしたものかと、スマホを手にしたまま視線を前へと向ける。

斜め前の方では兄さんがテレビを見ていた。今はお笑い番組をやっているらしい。

「どうしたの?」

考えていることが顔に出たのか、兄さんがこちらを窺ってくる。

お風呂上がりでほんのりと肌が赤い兄さんの姿は、何だかドキドキしてしまう。

またそんな無防備な……

いや、露出してるわけでもないから、これは私の過剰反応だろうか?

半袖に緩めの長ズボンといったごく普通の格好だけど、並みのアイドル以上の美少年様である兄さんが着ているだけで後光が差しているように見えてしまう。

女は狼狽して教えてあげたほうがいいのかな。それはそれで警戒されそうで嫌だけど、このままだと割と本気で心配だったり。

あれからセンと優香を説得するのは大変だった。

僅かなあの時間だけでここまで人は惚れこむことができるのかと妙な感心さえ抱いたほどだ。

人のことは言えないけど、私より早くなかった……？

「そういえば、いい子たちだったね」

「センと優香のことですか……？ 少し顔を合わせただけじゃないですか」

たったあれだけで何が分かったというのか……なんて、面白くなさそうに唇を尖らせると、兄さんはそれっきり困ったように黙ってしまった。

私は何を苛ついているのだろうか。

男の人にこんな風に当たるなんて女らしくない。

そうは思いながらもやっぱり内心は面白くない訳で……

「何の話？」

僅かな罪悪感を感じていると、お母さんが間に入ってきた。

何でもないと言っ気なく接すると「えー？」と、好奇心を露わにする。

だけど何度か生返事をしていると、いつの間にかいなくなっていた。

脱衣所の方から音が聞こえてくる。どうやらお風呂に向かったらしい。

これはチャンスだろうか。

外野がいない方が聞きやすいし。

「あの……兄さん」

「ん？」

今更になってあの二人と兄さんを会わせたことを後悔していた。

だけど面と向かってあの二人を邪険にするなんてことはできない。

これまでも仲良くしてくれた友達……親友だと思っている。

うーん、どうするべきか。誰も傷つかない答えはないのかな。

それに……何て聞こう。

あの二人が兄さんに気があるから……は、ないかな。直接的過ぎるし。

「あの二人……私の友達なんですけど」

「うん」

「また来たら話したいって言ってました」

兄さんが誰と仲良くしようと私には関係がない。

だけどそのことが何となく寂しいような胸の奥がざわざわするような……

いや、そもそも男の人相手にそんな軟派な真似をすることは非常識だ。

兄さんだつて困るだろう。

年が上なのは兄さんだ。だけど女としてここは私が責任を持つて断らないと。

その結論に至つてから後は早かった。

あとは兄さんがそれを——二人と会うことへの難色を示して口にして言つてくれればいい。

「あのつ、でも、兄さんもいきなりで困りますよね？　大丈夫です。こつちでなんとか上手いこと言つて」

「ああ、いいんじゃない？」

あつさりと返されたその言葉に胸の騒めきが強くなつた。

無意識に「え……」と、自分でも驚くほど弱々しい声を発してしまう。

「で、でもつ、兄さんとあの二人は初対面ですし……」

「誰でも最初はそうじゃない？」

「うつ、で、でも……」

でも、ぼつかりで続く言葉が出てこなくて、口をもごもごとさせてしまった。

上手く思考が回らない。

元々そんなに話すタイプじゃないから、一度言葉に詰まつてしまうとそれつきり黙つてしまう。

私の悪癖だ。

テレビの中では芸人さんのボケに合わせて大きなテロップが流れてワントーン大きな笑いが聞こえてくる。

だけど全然集中できない。

今も視線は兄さんと内容の入ってこないテレビの間を彷徨っていた。

「じ……じゃあ、そういうことなんで……」

続く言葉。振り絞った声は今にも消え入りそうなものだった。

虫の鳴くような小さな声量。目頭が熱くなってしまう、ぽつかりと胸に穴が開いたような感覚を覚える。

気付かれないように欠伸の振りをして袖で目を拭った。

「雪、もしかしてさ」

兄さんが立ち上がったってこっちに近付いてきた。

シャンプーとか石鹸の匂いに混じって男の人の香りがしてくらくらする。

「というか……え、な、なに？」

「嫉妬してる？」

言葉が出なかった。

たぶん凶星だったからだ。驚く私に「しよーがないな」と、柔らかく笑った兄さん。

ひよいつと脇に手を差し込まれた。

え……と声を出す間もなく兄さんは私を猫のように持ち上げる。

バランスを崩しそうになった。

だけど私のお尻がついたのは兄さんの上だった。器用に私の向きを反転させて膝の上に置かれる。

「雪は寂しがり屋さんだね」

一瞬でパニックになった。

頭は混乱状態。男の人の力強い香りに私の鼻孔が満たされて頭が蕩けるような感じ。

羽交い絞めされるみたいにながしりと抱き寄せる。口から心臓が飛び出るんじゃないかと思った。

全身が熱を帯びて顔が赤らむのが自分でも分かってしまう。

硬くて広い胸板に、お尻に感じるぐにぐにとした……だけど、どことなく硬度を感じるものが——って、え!?

「ちよ、に、兄さん!?! さすがに……!」

セクハラで訴えられる。

勿論訴えられる側はこつちだ。

お母さんに見つかったら節度を弁えろと拳骨が落ちるかもしれない。

私からは何もしてないのに、女というだけで理不尽だ……というのは身勝手な考えなんだろうか。

兄さんがどういふつもりなのかは分からない。

だけど、少なくとも兄さん対して私は邪な気持ちが入っている。こんなこと知られたら大変なことになってしまう。

ジタバタと抵抗するけど、兄さんの拘束は全く緩まない。

「はいはい、暴れない暴れない」

兄さんは的確に私の体の要所を抑えてくる。

それに加えて男の人の逞しい筋肉の力強さが無理やり私の動きを封じていた。

あ、やっぱり兄さんも男の人なんだ。なんて理解させられて、無性に顔が熱くなる。心なしかお腹の奥が熱を持った気さえした。

「まあ、聞いてよ」

いくら暴れても抵抗しても全くの無意味。

だったら早くこの時間を終わらせるために聞くのに専念するのが早いだろうか。

だけどそれはそれで勿体ないような……

ぐるぐるする。思考があつちこつちを行き来していた。

「……な、なんですか？」

後頭部辺りに兄さんの頭の重さが伝わってくる。

僅かな重み、それに加えて吐息が当たるとすぐったさに身を振る。

「嬉しかったよ」

「え？」

兄さんの言葉は今まで聞いたことがないような声色だった。

嬉しがっているような、悲しんでいるような。

哀愁の入り混じった言葉。

それに驚き身が竦んだ。

「雪は僕のことどう思ってる？」

「え……に、兄さんのことは……兄さんですけど……」

「昔みたいにお兄ちゃんって呼んでよ。距離ができたみたいで寂しいからさ」

「うぐ……そ、それ今関係あるんですか……？」

兄さんが私の太ももに手を置いた。

ビクツと体が跳ねあがる。兄さんの吐息が僅かに荒く聞こえるのは気のせいじゃないのかもしれない。

いのかもしれない。

どことなく艶っぽい兄さんの態度に私はたじたじだった。

と、というか兄さんの……股のところ、なんか……なんというかさつきよりも感触が

ハッキリしてるような。

「お兄ちゃんって呼んでくれたらさ、なんでも言うこと聞いてあげるよ」

ピシッと理性にヒビが入った気がした。

それに合わせて太腿の内側を撫で擦られてほんの一瞬だけ甘い吐息を零してしまう。亀裂の入った感情を必死に修復する。咳払いをすると自分に喝を入れた。

「さ、さすがに度が過ぎてますよ？ 私が本気にしたらどうするんですか……」

震える声でそう言いながらも私の胸はバクンバクンと激しい心音を鳴らし続けた。

感情がごちゃごちゃして息苦しいほど胸の奥が高鳴る。

兄さんがそんな私の耳元に口を寄せた。

「本気にしてよ。呼んでほしいな」

ぞわり……と、背筋が震える。

お腹の中にもならない致命的な熱が生じたのを感じた。

兄さんと触れ合っている箇所が敏感に感じるのは、私が劣情を抱いているからだろうか。

こんな下卑た欲望を兄さんに知られるわけにはいかない。

実の兄に欲情してるだなんて知られたら気まずいどころの話じゃないんだから。

兄さんが訴えるだけで私はあっさり和社会的な死を迎えてしまう。

やめて……それを言うだけでよかったはずだった。

なのに生唾を飲んでしまう。お腹の奥が熱くなる。股のところがムズムズしてしまっただけ。

永遠に感じるような刹那の時を経て、カステラののようにボロボロに崩れた理性が出した言葉は――

「お……お兄」

私がそれを口にした時だった。

「あれー？ ドライヤー知らない？ 確か洗面所にあつたと思うんだけど」

脱衣所の方からお母さんの声がする。

ドライヤーを探しているようで、その声には私は身体を思いつきり跳ね上がらせた。

驚きのあまり声も出なかった。

「残念」

くすくすと笑いながら兄さんは私を横に置いて離れてしまう。

さつきの痴態を思い出す。途端に顔から火が出そうなほどの恥ずかしさを感じた。

兄さんの優しそうな表情がそれを加速させる。

……ま、また揶揄われたのかな。

私はどれだけちよろいんだろうか。流されそうになったし、私みたいな陰キャにそんな態度してたらいつか本当に勘違いされて襲われちゃうよ？

思い返したら怒りさえ沸いてきた。

逃げるように部屋に戻り、兄さんへの苛立ちを誤魔化すように乱暴に布団を被る。

だけど……腹立たしいことにこの体の芯から末端まで届くような強い火照りはしばらくおさまってくれそうにないのだった。

第7話 登校

「ね、寝坊した……っ！」

平日の朝というのは例え5分だろうと貴重な時間だ。

それは社会人も学生も変わらない。

この日盛大に寝過ごした私はそれを痛いほど実感していた。

時計を見て飛び起きると、大急ぎでパジャマを脱いで制服に着替え身支度を整える。

チラツと目をやった時刻は既に8時前。

かなりギリギリだ。間に合わないかもしれない。

私みたいな日陰者は普段どれだけ目立たないかが重要になってくるのに。

こんな時に限ってなんで兄さんは起こしてくれなかつたのか。

そもそも寝坊したのは半分くらい兄さんが原因なのに……

制服のスカートのファスナーに手をかけた、その時――

「っ……」

愛液が乾いて質感が僅かに変わったたショーツの股布部分の感触に昨晚の記憶が思い起こされる。

夜遅くまで声押し殺して自分を慰め続けていた記憶。

持ち主に馴染られ続けたクリトリスは腫れ上がって薄っすらと充血している。

ひくつ、と如何にも敏感そうに震え、僅かな鈍痛が走った。

流石にやりすぎたことを猛省しつつ、頭の中ではあれは兄さんも悪いと自己弁護を繰り返した。

耳元で何でもするなんて囁かれたら意識するに決まってる。兄さんほどの美人からの言葉なら尚更だ。

もしあの時、お母さんの邪魔が入らなかつたらどうなっていたんだろう。それを考えないでもない。

むしろ昨晚はその後の展開をおかずに……

いやいや、と頭を振る。朝からまた思い出しそうになってしまっている。これはよくない。

煩惱を振り払うと、下着ごと替えて中学の制服になった。

上から消臭剤を散布して臭いを誤魔化す。男の人は女の人のオナニーをした後の雌臭さとか、すぐ分かるって言うし……兄さんにバレたらなんて思われるか。

いくら兄さんでも流石に引く気がする。嫌われることを想像してしまい怖くなった。本当にすっかり兄さんを異性として意識してしまうようになった自分が我ながら情けない。

2回3回と執拗に振りかけて臭いを誤魔化す。

軽く腕を嗅いでみる。うん、臭くない。

自分の体臭は分かりづらいと聞くけど、これだけやれば大丈夫だと思う。

シャワーを浴びる時間もなかったから仕方ない。

私は階段を降りて洗面所で顔を洗う。それからリビングへと顔を出した。

「おはよう」

柔らかに挨拶をする兄さんがいた。

私はむすつとしたまま返事を返す。無視なんて子供じみた真似はしないけど……それでも今兄さんの顔を見ると昨晩に押搦われたことが脳裏をよぎって面白くなかった。

何よりも兄さんの顔を見て心の底では喜んでる単純な自分が馬鹿みたいに思えてしまう。

遅くまでしていた自分のオナニー行為がなんだか恥ずかしくて顔を合わせられない。おかずにした張本人を前にして罪悪感を感じた。

……大丈夫だよ。結構念入りに消したけど臭いとか。

「昨日はごめんね?」

兄さんが謝る。

それを見て私は胡散臭いと感じた。

この人は本当に悪いと思ってるんだろうか?

思春期中学生にあんなことしたらどうなるかなんて分かり切っているだろうに。

現に私も昨日の夜は今までにないほど拗った。気持ちよすぎるのに何度やつても物足りなくて……つて、違う違う。

朝から何を考えているんだろう。

切り替えないと。

「別にいいですけど……で、でももうやめてもらえませんか。昨日のはよくないです」
最近を翻弄されっぱなしだし、今度こそ兄さんには惑わされたくない。

この人を異性として強く意識してしまっている自分を自覚しつつも、私はちっぽけな決意を固めて、用意してある朝食の席に着いた。

「嫌だった?」

「わ、私としては……兄さんが心配なんです……どうせ外でもそういう態度なんですよね。誤解されて変なことされても知りませんから」

「嬉しかったんだね」

「っ!？」 な、なんでそういうことに……っ!」

「いいんだよ? 今でも昨日のは有効だよ?」

「有効って、な、何言って」

それつきり私が黙ると、兄さんは大して気にした様子もなく食洗器へと向かった。

何だか私だけ意識してるみたいで自分が子供みたいに見える。兄さんの余裕な態度

が私とは正反対で妙にモヤつとした。

いや、そうじゃない。これもいつものことなんだ。

時間も本当にギリギリになってきたし、そろそろ出ないと……急ぎ朝食のベーコン

エッグを口に入れた。

それを牛乳で流し込むと、冷たさで頭が冷えて、目もさつきよりは冴えてくる。

「いってきます」

「一緒に行く?」と、後ろから聞こえてきたので跳ね上がった胸の平静をなんとか保ちつつ鞆を持った。

「いい、いいですから。兄さんは一人で行ってください」

よし、いい調子だ。

これ以上兄さんに好きにされてたまるものか。

子供じみた抵抗だという自覚はあったけど、こんな私にだってプライドくらいあるん

だ。

一緒に登校できないのは後ろ髪を引かれるけど、鋼の精神力で何とか耐える。どっちにしろ走らないと間に合わないから、兄さんとの登校は無理だ。

鞆を手を持ち、玄関へ向かいローファーを履いて扉を開けた。

聞こえてくる小鳥の囀り。どうやら今日は晴天らしく青空から光が降り注ぎ眩しさに目を細める。

そして――

「……………」

表札の所でスマホを片手に高校生くらいの女の人が立っていた。

誰だろう。見覚えのない人影。だけどその服装はどこか見た覚えがあった。

兄さんの高校の制服に何となく似てるような……………?

気怠そうに壁に寄り掛かった茶髪の高校生。制服を着崩してるし、耳にピアスマでつけている。見るからにリア充といった容顔の彼女は、私が思わず足を止めると訝しそうに目を細めた。

「あれ？ ……宮森さんのお宅ですよね？」

「…………ど、どちら様ですか？」

ほぼ同時にお互いから警戒した声が出る。

私の方がちょっとつかえてしまったのは初対面相手への経験値の無さのせいだと思おう。

うう、怖い。こういうタイプは苦手なのだ。

陰と陽。光と影。もしくは水と油、みたいな。

けど……今はそこじゃない。怪しい人相手にそんなことも言っていられない。

質問されたから答えるのが礼儀だったかもしれないけど……流石に知らない人だから距離を取ってしまう。

「悠の友達です。あなたは？」

友達って……転校したばかりで？　というか……え、よ、呼び捨て？　そんなに仲いいの!?

動揺を隠しながらなんとか口を開く。

「に、兄さんの妹です」

「ああ」

何だ、と興味なさそうに彼女は呟き視線をスマホへと戻した。

その態度が何だか勝者としての余裕みたいに見えてしまう。私なんて取るに足らない相手だと言われた気がした。

そして、兄さんが私の知らない人と仲良くしてたんだって当たり前のことが面白くな

かった。

そりや兄さんも友達くらい作るだろうけど。

いいことだと思う。兄さんは早速同級生と仲良くなれたらしい。

それに家まで教えて朝早くから待ってもらって……

「……なに？」

気付けば睨んでいた。

向こうも同じ。不機嫌そうな彼女との間に一瞬だけ視線で火花が散った気がした。

身勝手だけど胸の奥がムカムカする。それが表面的な態度に出てしまっていた。

年上相手に自分でも信じられないくらい攻撃的な態度だったように思う。

兄さんは私のことを憎からず見てくれているのだと思っていた。

だから勝手に安心してた。なのに……

「ひ、非常識ですよ。いくらクラスメイトでも男の人の家に押し掛けるなんて」

そうだ。そもそも兄さんがこの人と約束をしていたなんて保証もないんだし、無理や

り押し掛けたという可能性だって全然ありえる。

我が意を得たりとばかりに私は声を大きくした。

兄さんは私で遊んでるんじゃないかってくらい押搦ってくるけど、男の人なんだし妹

として私が守らないといけない。

「ただ彼女には私に向かって露骨に溜息を吐く。な、なに？ 失礼なんだけど。」

「嫉妬？ いい年なんだから兄離れしないと嫌われるよ？」

「っ！」

昨日の夜に兄さんにも言われたことだったから、すぐに自覚できた。

反論しないと、でもやっぱいつもみたい言葉はすぐには出てこない。

ネガティブな思考がよぎった。

「あれ、雪。まだ出てなかったの？ 遅刻するよ？」

家の中から聞こえてきた兄さんの声。

その言葉が私なんて邪魔だと言ってるみたいなのに聞こえてしまい胸の奥がギュツとなつた。

目の奥が熱くなつてしまう。遅刻するかもしれないのに、足が地面に縫い付けられたみたいに動かない。

「遅刻しちゃうんじゃないですか？」

勝ち誇るの兄さんを待っている対面の彼女だ。嫌味つたらしい口調で私を煽るようにニヤニヤと笑っていた。

なんだか負けた気がして無性に悔しかった。

兄さんに興味を無くされた気がして、どこか遠くなったように思えて悲しくなる。

「……お、お友達ができたんですね」

「うん？」

迎えに来てもらっているのにわざわざ兄さんは分からないふりで惚けてきた。

玄関で靴を履いている兄さんに向けて言うけど、その顔を見ることができない。

「……いつてききます」

私は自分の声が震えているのを自覚する。

我が家に背を向けた。

後ろの方から聞こえてくる兄さんとその女友達の声。

なんて話してるのかは聞こえないけど……私は逃げるように学校へと走った。

第8話 下校

教室の隅で私は頭を抱えていた。

外は爽やかに晴れ渡っているというのに私の周りだけまるで曇っているかのようにどんよりとしている。

今日は一日中こんな感じで過ごした。

気付けば午後の移動授業。誰と話したかも覚えてないし授業もずっと上の空だった。「……ずっと落ち込んで、どうしたんすか？」

最初はセンと優香が兄さんをくとか言ってきたけど、上の空な私を見て今では心配してくれていた。

そして、またセンが私の席へと来ていた。

優香の方は先生からの呼び出しがあったようでここにはいないけど、気にしてくれていたのは分かった。

最近は兄さんの話題が多かったけど、今では私の空気を察してくれている。

なんだかんだで根は優しく真面目な二人なのだ。兄さんの話題で茶化すことなく声をかけてきた。

でもまあ心配事はその兄さんに関してなんだけどね……

その時のことを思い返して胸の奥がキュツとなった。あんな風に子供っぽく嫉妬して逃げるように家を出てしまった。

兄さんを取られたんじゃないかという敗北感から気分が沈み込んでいく。

センが話しかけてくるけど、生返事をしてしまう。

悪いことをした。それに精神的に弱っていたからだろう、ついつい口が軽くなる。

「兄さんが家に知らない女の人呼んでた……」

それを言った後で、相談相手間違えたかも？　とも思った。

センと優香の二人は兄さんを見て以来アタックしようとしている。

そのためこの件を相談し辛くなってしまったからだ。

「知らない女の人？」

「たぶん同級生だと思う」

「えっ、マジっすか」

兄さんって男の人なのに女の人のことを馬鹿にしたりしないし、コミユカも高そうだ

から人気がありそうだ。

私みたいな陰キヤとは大違いだった。

分かり易く動揺するセンを横目に深く溜息を吐いてしまう。

「……めっちゃ落ち込んでるっすね」

「センは気にならないの？」

彼女だつて兄さんを狙つてたと思つてたけど。

センは腕を組んで考え込む。すると思いついたとばかりに提案してくる。

「勿論気になるっす！ でもそれなら聞いてみたらいいんじゃない？」

「怖い……もし兄さんの彼女とかだったら遊びに来ることもあるかもしれないし、そう
なつたら私なんて家にも居づらくなるし」

ネガティブな思考が脳裏をよぎると、そこから次々と悪い考えが巡つてしまう。

「転校したばっかりつて言つてなかつたつすか？ 友達でも早いくらいだし、さすがに
そんなすぐには……」

「二目惚れからのラブコメが始まったかもしれないじゃん！」

思わず出た声が大きくなり、慌てて口元を抑える。

教室を見回したけど、ほとんどが移動していて人は少ない。

聞かれていなかったことにホッと安堵する。

ちなみに私のさっきの言葉だけど、これはセンの实例という根拠がある。

兄さんの容姿なら相手からの一目惚れは十分にあり得る話だと思う。

性格もいいからそこからの進展だって……

「どつちにしろ聞くだけはタダっすよ？」

「もし聞いたとして仮に彼女じゃなかったのに、私の一言で兄さんが意識し出して、二人が仲良くなつてくつ付いたら最悪だし」

「めっちゃぐだぐだ言うっすね……」

センは心なしか呆れ気味だ。

頭を抱える私は、今朝の出来事を更に詳細に説明する。

教室の中なので一応少し声を落とした。

家に私の知らない兄さんの友達が尋ねてきていたこと。

その時に思わず逃げ出してしまったこと。

名前と呼んでいたことから恐らくは仲はいい……と思う、たぶん。

私の兄さんなのに……

それを考えるだけでやっぱり胸の奥がムカムカした。

「とかちよつといいつすか？」

「? なに?」

「雪ってお兄さんのこと好きなんすか？」

「えっ、な、なに急に？」

「いや、お兄さんが雪を好きかもしれないとは相談を受けたんすけど、実際雪がどう思ってるのかは聞いたことないな」と

「……ちよつとは意識してるよ」

兄さんみたいな美人と一つ屋根の下だなんて全国女子の垂涎もののシチュエーションだ。

恨まれたっておかしくないくらい憧れられる状況だし。

「ちよつとの落ち込み方じゃないっすよそれ……」

すると、センはまた思いついたとばかりに手を叩く。

「気晴らしに買い食いでもしたらどうっすか？」

「登下校中に？ 校則違反だと思っすよ」

「その校則たぶん誰も守ってないっすよ？」

まあ確かにあつてないような形骸化したルールだけど。

うーん、でも率先して破ろうとは思わないかな。

「つて、そろそろ移動しないとやばいっすよ！ 急ぐっす！」

センが教科書を片手に背を向けて教室を出て行く。

今回は珍しく兄さんのことで頼み事されなかったな……やっぱり心配してくれたんだらうか。

◇

「イチゴ練乳お願いします」

見たことのない組み合わせのクレープが売ってたので買ってみた。
かき氷とかではよく見るコンビだけど。

近くの公園でベンチに座る。

OLや女子校生や子供の声が聞こえた。

それらを聞き流しながら、クレープを一口。あ、美味しい。

練乳がくどいかなとも思ったんだけど、イチゴの酸味が後から効いてきて思ったよりもさっぱりとした後味だ。

「兄さんのことか……」

嫌いじゃない、どころかどっちかというところだと好き寄りだけど。

考えているうちにクレープを食べ終わる。

レシートと一緒にゴミを捨てた。

もしかしたら私は自分でも思っている以上にあの人を異性として意識しているのかもしれない。

ここまで心を掻き乱されるのは初めてかもしれない。

「……帰ろっかな」

校則違反に罪悪感を感じなくてもなかったけど、なんだかんだですつとふさぎ込んでるよりかは気がまぎれたかも。

今度はセンも誘おうかな。優香も入れて三人で一緒に食べるとか。

「っ!？」

だけど、私は思わず足を止めた。

咄嗟に隠れてしまう。

視線の先には兄さんと……

「ねーねー、悠？ 聞いている？」

今朝の女の人がいた。

第9話 溺れていく

兄さんと隣り合って歩く今朝の女の人。

制服を着崩していて如何にもチャラそうといった印象を抱かせる彼女は、今にも兄さんと腕でも絡めるんじゃないやってくらい距離が近い。

公園の外周でランニングをしていた女の人が隠れる私を訝しそうに見てきたけど、それどころじゃなかった。

何の話だろう。ぎりぎりで聞こえるくらいの距離……けど、兄さんの方は聞き取れない。

兄さんの声が小さいというより、女の人の方の声が大きいかから聞こえてる感じ。

気付かれないように身を屈めながら聞き耳を立てる。

……我ながら不審者みたいだった。

「悠、聞いている？　なんかさつきから上の空じゃない？」

兄さんの顔色は何えない。

こちらから見えるのは兄さんに話しかける同級生らしき彼女の楽しそうな表情だけ。何となくこの人は兄さんのことが好きなのかもしれないと思った。

女の勘なんて大袈裟なものじゃないけど、それだけ私と話した時とは違って、分かりやすい嬉々とした笑顔を浮かべていた。

そんな場面を見せられてしまうと、やっぱりこういうハキハキした明るい人が兄さんに相応しいんじゃないか思ってしまう。

そうだ、私陰キヤだった。

ネガティブな思考ばかりが浮かんでくるし、こんな時だというのに何の行動にも移せない。

精々出来る事と言えば事の成り行きを見守るくらいだった。

「ああ、ごめんごめん。それでさ……話があるって言ったじゃん？」

髪の毛先を弄りながら彼女は兄さんを見据える。

私は見つからないように黙って隠れたままで、二人の方を見ている。胸中を一抹の嫌な予感が過る。

「私さ、悠のこと嫌いじゃないっていうか……なんか話しやすいなーって思ったんだよね」

たぶん……告白だった。

咄嗟に一歩踏み出して、止まった。

行つてどうなるというのか……でも、ここで行かないと兄さんが遠くへ行つてしま
う。

「それでどうかな？ 私これでも顔は良い方だと思っただけ……」

胸の中がどろどろとした嫉妬で塗り潰されていく。

身勝手な感情だと分かつていながらも、心の中では「やめて」という我儘な言葉を発
し続けていた。

迷っていたのが悪かったのだろう。彼女は兄さんへと決定的な言葉を告げた。

「付き合わない？」

一陣の風が吹き、頬を撫で上げ、木々が騒めく。

もう駄目だった。頭をハンマーで殴られたみたいな衝撃が走った。

勇気もなくせに、うじうじして、人の恋路に嫉妬ばかりする。

何も言ひ出せない自分が情けない。

私の兄さんなのに……だけど、それだけだ。

兄さんにとって私は血の繋がりがあるだけの同居人。

異性として見れない、ただの妹だ。

心臓が痛くて堪らない。涙が出そうになるほど苦しかった。

兄さんが他の誰かのものになるかもしれないと思うだけで、胸の奥がぎゅつと締め付けられる。

それからどうやって帰ったかは……正直覚えていなかった。



自室にて、私はこれ以上ないほどの無気力をベッドの上で晒していた。

「……………」

兄さんはあの人と付き合ったのかな。

家まで迎えに来てもらう仲だし、たぶん付き合ったんだろう。

これからはあの人と、仲良く手を繋いだり、優しく笑い合ったり、遊びに行ったり……兄さんは私にまた悪戯っぽく笑いかけたりしてくれるのだろうか。

もしかしたら……もうないのかもしれない。

深く溜息を吐いた。

私はこれからどうすればいいんだろう。

ベッドの上で自問する。

兄さんへの告白を見てから、ずっとその繰り返しだ。

起き上がる気力すらなく、ただ枕に顔を埋めて憂鬱になる。

「……あ、LINEきてる」

いつもの友人達からのメッセージに目を通すと心配するような言葉が続いていた。

返す気力もない。ただ一言『大丈夫だよ』とだけ返事をしてスマホの電源を落とす。

「あー……」

こうして私の初恋はあっさりと、あまりにも呆気なく終わりを迎えた。

ドラマチックな展開なんて何もない。

ただ再会した兄妹はこれからは一線から引いた関係で過ごしましたとき。

心の中に、これが現実だよねーと、慰めの言葉をかける。

「……ううー」

ばたばたと足で布団を蹴った。

何でもっと早く行動しなかったんだろう。

少しだけでも勇気を出していたら違ってたのかな。

そんな後悔に気分を沈み込ませていると――

「っー」

階段を上がってくる音が聞こえた。

しばらく身体を硬直させていると、部屋を誰かがノックする。

お母さんのノックじゃない。

案の定、兄さんの声が聞こえてきた。

「雪、ちよつといい？」

「よくないです。放っておいてください」

「入るね」

……聞いてる？

「話したいことがあるんだけど」

「……聞こえてなかったんですか？ 今は放っておいてほしいんですけど」

だけど、兄さんは私の言葉を見殺しして部屋へと入ってきた。

「ちよつ」

「すぐ出ていくからさ、少し聞いてよ」

たまに兄さんは強引だ。

私が思春期だということを忘れてやしないだろうか。

オナニーしてたらどうするつもりなの？ トラウマ確定だよ？

「雪の部屋に入るのも久しぶりだね」

「……初めてですよね」

「子供の頃はよく部屋でかくれんぼしたり、おままごとしなかった？」

「あー……」

そういうえば……というかよく覚えてますねそんな昔の事。

物心ついた頃だから、ちよつと記憶が薄めというか。

「雪は子供の頃から泣き虫だったから、見つけやすいところにはいないとすぐに泣いちゃったんだよね」

「……恥ずかしいんですけど」

言われて段々と思いついてきた。

過ぎた期間が短いから思い出しは少ないけど、それでも大切な過去だった。

私はいつから兄さんのことを忘れてしまったんだろうか。

「あの……兄さん、私見てたんですけど」

この際だ、こんな時に入ってきた兄さんが悪いと自分に言い訳をして聞いてみた。

「ん？」

「告白、されてましたよね？」

「ああ、うん。そうだね」

あつさり肯定されて、ずきつと胸が痛んだ。

人違いだとしても期待していたんだろうか。
呼吸が少しだけ苦しくなる。

「に、兄さんは……ああいう人がタイプなんですネ」
怖くて顔があげられない。

兄さんの顔を見ることが出来ないまま、私は矢継ぎ早に言葉を紡いでいく。

「よかったじゃ、ないですか……」

言ってあげないと。

おめでとう、つて。

そしたら私も前に進める。

兄さんのことを祝福できる。

なのに――

「何がよかったの？」

「え？」

「雪はよかったの？」

何を言っているんだろうこの人は。

ここでその問いかけはもうそういうことだと思えないけど……えっ？

困惑する私の隣に兄さんが腰掛ける。

「お、お兄……ちゃん……?」

「……言うこと聞いてほしいんだ? なにかな?」

「あ、あの人と……付き合うのは……その……」

「ここで「私と付き合つて」と言えなかったのは、小心者だから許してほしい。

告白をしたこともされたこともない陰キヤにはこれが限界だ。

「あんまり……あ、あの人と話さないでほしい、かな?」

今思えば気持ち悪いことこの上ない物言いだった。

教室の隅っこを縄張りになっている日陰者が何を調子に乗っているんだと思われるかもしれない。

黒歴史確定だ。後になってベッドの上で悶えて転がり回ることだろう。

そう思い慌てて「な、なーんて!」と続けようとした私の頭が撫で上げられた。

「うん、いいよ」

「え……っ?」

「あの人とはもう話さない。それでいいんだよね?」

挙動不審に視線をあちこちにやりながら、それでも私はこくりと頷いてしまう。

あつさりど悩みが解決したことに私の脳内が軽い混乱状態に陥った。

「雪の方が大事だからね」

それから「よしよし」と子供をあやすように私の頭を撫でてくる

心が蕩けるような触れ合い。久しぶりのスキンシップに身も心も絆されるのを感じた。

嬉しさと恥ずかしさが混ざりになり、顔が熱っぽくなる。そのまま大きな胸板に頭を預けた。

「雪は甘えんぼだね〜」

そう言っつて“お兄ちゃん”は私を優しく抱きしめた。

そんなこととして大丈夫？ とか、友達だったんじゃないの？ とか、色々浮かんだけど……何よりも自分を優先してくれたことが嬉しくて涙が滲む。

罪悪感だつてあつた……けど、そんなことは全部がどうでもよくなった。

男の人に抱き締められる感触は麻薬のような多幸感を私にもたらす。

(あ……駄目、これ……ほんとに好きかも……)

自分を甘やかしてくる大好きな男の人の温かみに頭がくらくらした。

第10話 とあるLINEでの会話

《U》『佐々木さん、今いいかな?』

《佐々木》『なに? 嘘告までさせた鬼畜な悠さんは上手く物事を運べたんですかね?』

《U》『そんなに皮肉っぽく言わなくても……上手くいったよ。嫉妬してたからたぶん今回のことで明確に意識し出したんじゃないかな。ちよろいよね』

《佐々木》『そ、じゃあこれで私もお役御免つてわけね』

《U》『分かってるとは思うけど、言わないでね?』

《佐々木》『ちゃんとこれが終わったら履歴も消すから大丈夫だよ。そっちこそ私が万引きしてる写真は消したのよね?』

《U》『約束は守るよ。これでも顔も性格もいい優等生で通ってるんだから信用してほしいな』

《佐々木》『いや……顔はいいけど、性格は悪魔みたいだよ。妹との関係の後押しのために同級生脅して利用するとか』

《U》『妹との恋路を応援してほしかっただけだよ』

《佐々木》『恋路ね……歪んだ愛なこと。というか携帯にGPSは犯罪だからやめたほうがいいと思うけど』

《U》『家族だからセーフかな』

《佐々木》『いやいや、アウトでしょ。完全にやばい奴だよ』

《U》『言い訳にはなると思うよ。妹の心配くらいならどこのお兄さんもすると思うし』

《佐々木》『する……かな。うーん、そう……』

《U》『凄く府に落ちてないね』

《佐々木》『いや、男なんてそんな感じでしょ。シスコンとか初めて見たんだけど。悠がレアケースすぎると思う』

《U》『そういうもんかな。ああ、それと最後になるから言うけどさ』

《佐々木》『誤魔化したね……で？ なによ？』

《U》『クラスでは色々言われてるけど、僕は佐々木さんのことはわりと嫌いじゃなかったよ』

《佐々木》『あつそ、それなら私でもよくない？ 私も悠のことは嫌いじゃないしき。わりと真面目に妹ちゃんに振られたら、私でよかつたら付き合うけど？』

《U》『その時は、落ち込んでると思うから慰めてよ』

《佐々木》『ノリ悪いってよく言われない？』

《U》『何度かあつたかも』

《佐々木》『ああ……そうなんだ。悪いこと聞いたね』

《U》『謝られると居た堪れないんだけど……』

《佐々木》『少しくらい意趣返しさせなさいよ』

《U》『そうだね。色々と迷惑かけたし……変なことに巻き込んでごめん、ありがとうね』

《佐々木》『……ほんとだよ、ばーかばーか』

《U》『もう万引きなんてしちや駄目だよ。困ったら僕が買ってあげるから』

《佐々木》『パソコンと液晶タブレットが欲しいんだけど』

《U》『ガッツリと……』

《佐々木》『冗談だよ。じよーだん。ま、誰にも言わないでくれたのは感謝してるよ』

《U》『じゃあね、佐々木さん』

《佐々木》『はいはい、頑張れよシスコン兄貴』

『<<U>>がグループから退会しました』
『<<佐々木>>がグループから退会しました』